

イチジクオーバーラップ整枝における栽培管理指標

【背景・目的・成果】

凍害軽減や樹勢抑制による着果安定や品質向上効果があるオーバーラップ整枝を現地導入するにあたり、ほ場条件に応じた適切な主幹長や植栽間隔の設定基準が求められていました。一方で、オーバーラップ整枝は主幹長や主枝長を調節することで、ほ場条件や樹齢の違いによって生じる樹勢の強弱をある程度調整することが可能な樹形です。そこで、適正な結果枝確保のための栽培管理指標を作成しました。

【開発技術の内容】

オーバーラップ整枝(模式図:図1)の適切な主幹長や植栽間隔を検討し、以下の指標を作成しました。

適切な主幹長は？

着果開始節位が一文字整枝に比べ2~3節低くなり、着果率が向上し、9月上旬の収量が20%増加

○主幹長は1~2mが適している(表1、図2)

適切な樹間・主枝長は？

同一樹内の結果枝の生育のバラツキが少なくなり、着果が安定(着果率80%以上)

○樹間、主枝長は1.5~2mが適している

適切な結果枝の太さは？

着果安定と大果生産が可能(図3)

○結果枝の基部径を25mmとなるよう樹勢管理(※)します

※【樹勢管理の目安】基部径が・・・

- ①太くなる場合(樹勢抑制対策)
 - 主幹長を2m以上とする。
 - 樹間を広げ(間伐)、主枝長を長くする。
- ②細くなる場合(樹勢強化対策)
 - 主幹長と主枝長を短くする。

【特許第6840311号】

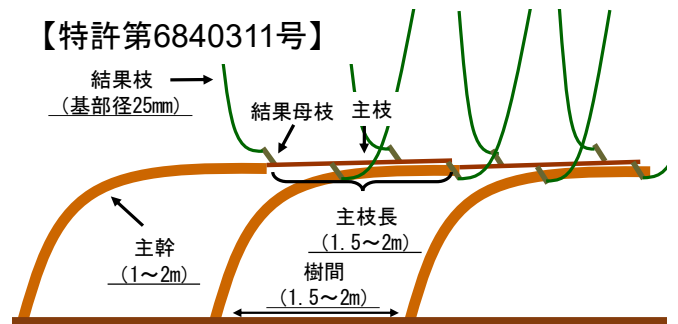


図1 イチジクのオーバーラップ整枝の模式図

表1 整枝法の違いが着果に及ぼす影響(2019年)

整枝法	着果開始節 ^b	着果率 ^c
オーバーラップ ^a	2.5	92.3%
一文字(慣行)	5.9	73.6%

a: 主幹長1.5m

b: 幼果が着果した最下節位

c: 結果枝1本当たりにおける[(着果数)/(節数)]×100

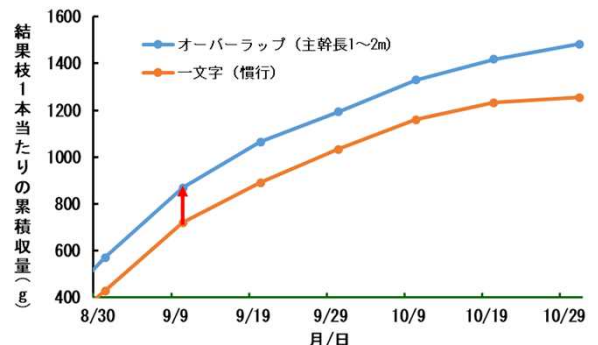


図2 結果枝1本当たりの累積収量の推移

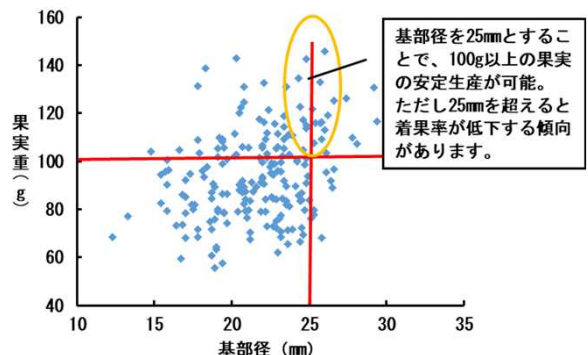


図3 結果枝基部径と果実重の関係(2019~2021年)

【今後の取組】

「オーバーラップ整枝の仕立て方マニュアル」を活用して、関係機関の連携により、新・改植園を中心にオーバーラップ整枝を普及していきます。

